

講義時間／午後6時30分～午後8時10分(計5回)

令和4年度山形大学公開講座
「人文社会科学部」

国民国家を 考え直す

第1回 9月13日(火)
ウクライナ人とウクライナ国家
:選択と失敗と誕生の30年
●天野 尚樹(ロシア史・境界政治史)

第2回 9月20日(火)
「日本人」のつくり方・つくり方
●小幡 圭祐(日本近代史)

第3回 9月27日(火)
国民形成における
包摂と排除:ミャンマーの事例
●今村 真央(東南アジア史)

第4回 10月4日(火)
移民(課題)大国としての
イギリス:国家統合・社会統合の
失敗の観点から
●源島 穰(行政学・福祉国家論・現代イギリス政治)

第5回 10月11日(火)
国際法上の人民自決権・
国際人権法の可能性
一ひとつの解となりうるか?
●丸山 政己(国際法)

【会場】山形大学小白川キャンパス
人文社会科学部1号館1階103教室
およびオンライン(Zoomウェビナー)

※見逃し配信あり

【受講料】2,000円

※お支払い時、別途手数料(275円)がかかります。※学生(高校生以上)は無料。

【対象】一般・学生(対面は定員60人)

※学生は高校生以上対象。※会場内でのマスク着用やアルコール消毒など、新型コロナウイルス感染予防対策にご協力をお願いします。また、今後の状況により開催方法がオンラインに変更になる場合がございますので、ご了承ください。

◆申込方法

9月8日(木)までに、右記のURLもしくはQRコードから、パソコンやスマートフォンで専用フォームにアクセスをして、必要事項をご記入の上、送信してください。



▶ <https://www.y-ex.jp/extension/post-31.html>

【山形大学エクステンションサービス推進本部】

☎ 023-628-4779

✉ yu-extension@jm.kj.yamagata-u.ac.jp



ナショナリズムと 多文化共生は 両立できるのか?

世界各地で民族紛争や国境紛争が絶えません。その背景には、国家モデルが抱える構造的な問題があります。本講座では、近代国民国家形成の歴史を制度と文化の両側面から再検討するとともに、複数の事例を通して多文化共生論の課題と可能性を探ります。

令和4年度 山形大学公開講座
[人文社会科学部]

国民国家を 考え直す

— ナショナリズムと多文化共生は
両立できるのか？

世界各地で民族紛争や国境紛争が絶えません。その背景には、国民国家（ネーションステート）という国家モデルが抱える構造的な問題があります。国民国家では、国民（ネーション）の同一性を強調する傾向が強く、しばしば文化的本質論や排他的ナショナリズムが生まれ、マジョリティとマイノリティの間、隣接する国々の間で民族主義的対立が起こります。それでは、国民国家はいかにして多民族、多言語、多宗教が共存する空間をつくることができるのでしょうか？ 本講座では、近代国民国家形成の歴史を制度と文化の両側面から再検討するとともに、複数の事例を通して多文化共生論の課題と可能性を探ります。



講義時間 / 午後6時30分～午後8時10分(計5回)

第
1
回

9月13日(火) ウクライナ人とウクライナ国家 :選択と失敗と誕生の30年

●天野 尚樹
(ロシア史・境界政治史)

ウ クライナという国家は、ウクライナ民族が独立した国民国家(nation state)として自ら建設したわけではありません。ソ連解体によって、望まないまま国家として独立することになってからの30年間は、多様性に配慮したウクライナ国民国家と、排他的なウクライナ民族国家(national state)との間の選択の歴史でした。そしていま、そのどちらでもないウクライナ国民による国家が生まれつつあります。ソ連解体とロシア・ウクライナ戦争のつながりをウクライナ国家の建設過程から見渡します。

第
2
回

9月20日(火) 「日本人」の つくり方・つくり方

●小幡 圭祐
(日本近代史)

現 代の日本では、「在日」と呼ばれる人々や外国人技能実習生など、外国にルーツをもつ人々に対する差別やヘイトクライムが後を絶ちません。ところで、彼らに對置されるであろう「日本人」とは、どのような人々であるかを皆さんは説明できるでしょうか？ 本講座では、国境画定作業が行われた明治初期の日本を素材として、どのように「日本人」をつくったのか、どのように「日本人」がつくられたのかを考察することで、現代日本における「多文化共生」を考える糸口にしたいと思います。

第
3
回

9月27日(火) 国民形成における 包摂と排除:ミャンマーの事例

●今村 真央
(東南アジア史)

近 代国民国家の大きな特徴は、国境と国籍を正確に定めることにあります。国民国家の形成においては、国境と国籍が確定されることで、包摂(インクルージョン)と排除(エクスクルージョン)の両方が同時に起こります。この過程では、原則として、国民として認められる人々は平等な構成員として包摂される一方で、国民として認められない人々は国家(国土)から追放されることになります。しかし、この原理原則が実際にどのように運用されてきたのかを検証するには、様々な事例を調べるのが求められます。この講義では、東南アジアから多民族地域に生まれたミャンマーを例に取り、包摂と排除の変遷を辿ります。

第
4
回

10月4日(火) 移民(課題)大国としての イギリス:国家統合・社会統合の 失敗の観点から

●源島 穰(行政学・福祉国家論・現代イギリス政治)

大 英帝国の名を馳せたイギリスはたくさんの植民地を抱え、戦後も旧植民地から移民をたくさん受け入れてきました。しかし、近年、イギリスは自国民と移民の分断に揺らぎ、移民を送り出してきたEUからも離脱してしまいました。なぜ移民に「馴れている」国だったはずのイギリスは移民を拒む国になったのでしょうか？ 今回は国家統合・社会統合の失敗という観点から、イギリスの移民受入れとその帰結を説明します。それを先事例として、移民の受入れを本格化させつつある日本の今後も考察します。

第
5
回

10月11日(火) 国際法上の人民自決権・ 国際人権法の可能性 —ひとつの解となりうるか？

●丸山 政己(国際法)

20 世紀後半以降の現代国際法は、国民国家からなる国際秩序を前提として、まさにナショナリズムと多文化共生の対立・競合関係のなかで展開してきたといってもよいように思います。領土保全原則を前提として、特定の集団・人民はどのような場合に分離・独立できるのか、できない場合であっても、国内においてそうした集団・人民の一定の権利を保障させる仕組みをどのように構築していくか、といった具合にです。本講義では、人民自決権や国際人権法の形成・発展・隘路の歴史をたどることで、多文化共生の可能性と課題について考えてみます。